

外天楼

設計趣旨

都市の中で建ち続ける「塔」にはどこか「塔らしさ」が失われているように感じる。塔らしさのない塔はそれが建つ地域の地域らしさをも奪っていく。私はそういった塔が建ち並ぶ大阪梅田のそばにありながらも「あふれだし」などによって人々の生活が見え地域性が蓄積されている中津に現代の塔から失われつつある「塔らしさ」を復権させた塔を設計しその塔での生き方を提案する。

敷地情報



大阪梅田は2024年の夏にうめきた2期エリアの開発によって新たにオフィスやホテル、高層マンションなどの塔が建つ。エリアの半分が都市公園として計画されているため、そこに建つはずであった塔は将来うめきた2期エリア周辺に建つことになる。こうして垂直に床面積を積層させ徐々に周辺も垂直に発展していくものを梅田らしきとする。それに対して対象敷地である中津は都心に近いにも関わらずごちゃごちゃとした情緒のある街となっている。こうしたものを中津らしきとする。もし、うめきた2期によって周辺の地域にも塔が立つとなると中津らしさも次第に梅田の塔によって飲み込まれてしまうだろう。

「塔らしさ」

塔は古くから、高くそびえ立ち、時代や思想、国や地域など多岐にわたり常に何かを象徴し続けてきた。現代の塔は高いだけで「塔らしさ」を感じない。高さや象徴性は「塔らしさ」と言えるがもっと多くの意味をはらんでいると考え、現代の塔とかつての塔を比較することで高さや象徴性以外の「塔らしさ」とは何かを考えた。

①塔に対する実感：塔に登り高さを得るために空間を体験することで生まれる実感、塔がそこに立っていると言う実感。（高さを得るために階段をのぼる。周囲から突出している。）

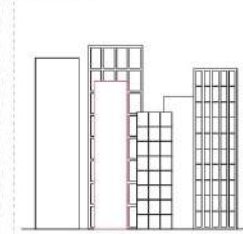
②みる見られる関係：地域から塔が見られる、塔から地域をみるという関係性。塔が建つ周辺との関係性がある。

③想像の余地がある：個人の思想や人々の夢、権力や技術力などの目に見えないものを形にした塔は、受取手によって解釈が異なる。

梅田の塔と中津の塔

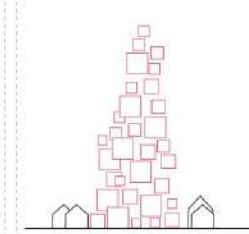
梅田の侵食を回避するため、梅田の塔の要素を持ちながらも中津でしかできない塔を計画しなければならないと考える。

梅田の塔



- ・都市へのアクセスが容易。
- ・床面積を積層させ効率よく人がたくさん住まうことができる。
- ・地域との関係性が希薄な計画。
- ・たくさん建っているため、周りからの見られる対象ではない。
- ・人の生活を想像する余地がない。

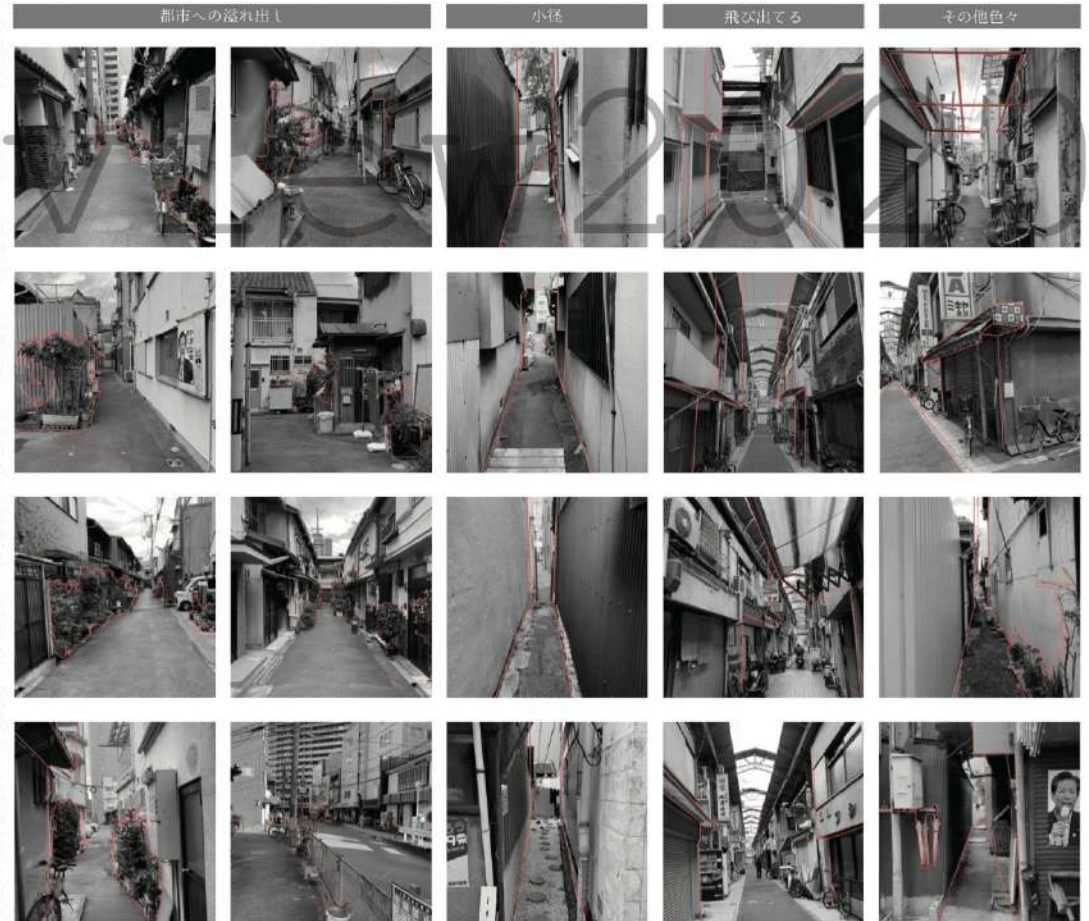
中津の塔



- ・都市へのアクセスが容易。
- ・床面積と地域性を積層させ様々な目的の人が住むことができる。
- ・地域との関係性が生まれる計画。
- ・住宅街のスケールに対してかなり高く建ち、見られる対象である。
- ・人の生活が感じられる、想像できる。

敷地周辺で確認できた中津らしさ

あふれだしや増築や改築によって凸凹したファサード、アーケードの骨組みなど、都会では許容されない風景が中津の路地空間では許容されている。こういったものが生活感を与え、中津にしかない情緒あふれる「らしさ」を生成している。



「塔らしさ」と「中津らしさ」

何かを象徴として立てられた塔はそれが立つ地域と関係を持ちやがて地域を象徴するものとなる。しかし現代の塔は地域らしさを無視し、奪いながら建ち続けている。「中津らしさ」を象徴とした塔を計画するにあたり、現代の塔から失われている「塔らしさ」を復権させることで梅田の塔の侵食から「中津らしさ」を守る。

①塔に対する実感：中津の路地空間を積層させ、上には階段でのぼることで「中津」に住んでいるという空間的な実感、塔を登るという身体的な実感が得られる。

②みる見られる関係：中津らしさを積層させる。中津を象徴する塔は地域から見られる対象になる。また、この塔の空間を通して中津の都市構造を住民が認識することで、みる見られる関係が生まれる。

③想像の余地がある：塔全体に表出したあふれだしが人々の塔での生活を想像させるきっかけとなる。またあふれだしが住民によって更新されていくことで塔の過去や未来を想像させる

ダイアグラム

基本ボリューム



中津で見られる建物の尺屋のスケール感を元に 3640 x 3640 の基本の大きさをし、水廻りとリビングを計画する。

積層



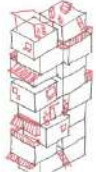
水廻りとリビングのボリュームを二つ以上重ねて住戸としそれを積層させる。

スペースをうむズレ



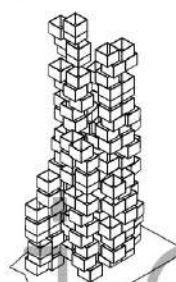
ボリュームをずらし、住人が手を触れることのできる共用部が生まれる。これが中津の路地空間となる。

中津の表出

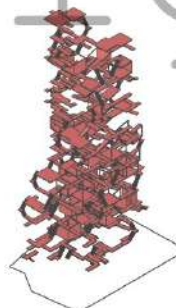


うまれたスペースに居住者が集まり、生活が溢れることで中津らしさが表現する。

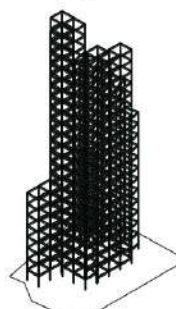
住居ボリューム



共用部



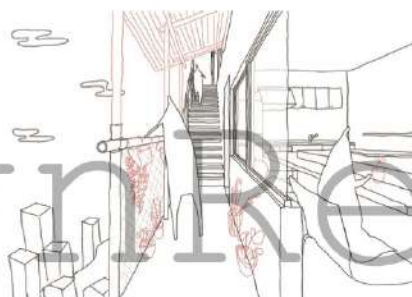
構造



住宅のボリュームの間に共用部を多くすることで塔全体を親戚的に感じながら登ることが出来る。また共用部は各住戸の溢れ出しを許容し中津の路地空間が立ち上がりたかのような空間が生成される。そういつか溢れ出しが塔の外観に表出することで中津の塔は完成する。地域性を継承させた塔は地域の象徴となる。

更新を許容する塔

更新されることで塔に時間軸が生まれ、住民や共用部に過去や未来を想像することができる。



ある住民が共用部に屋根をかけている。



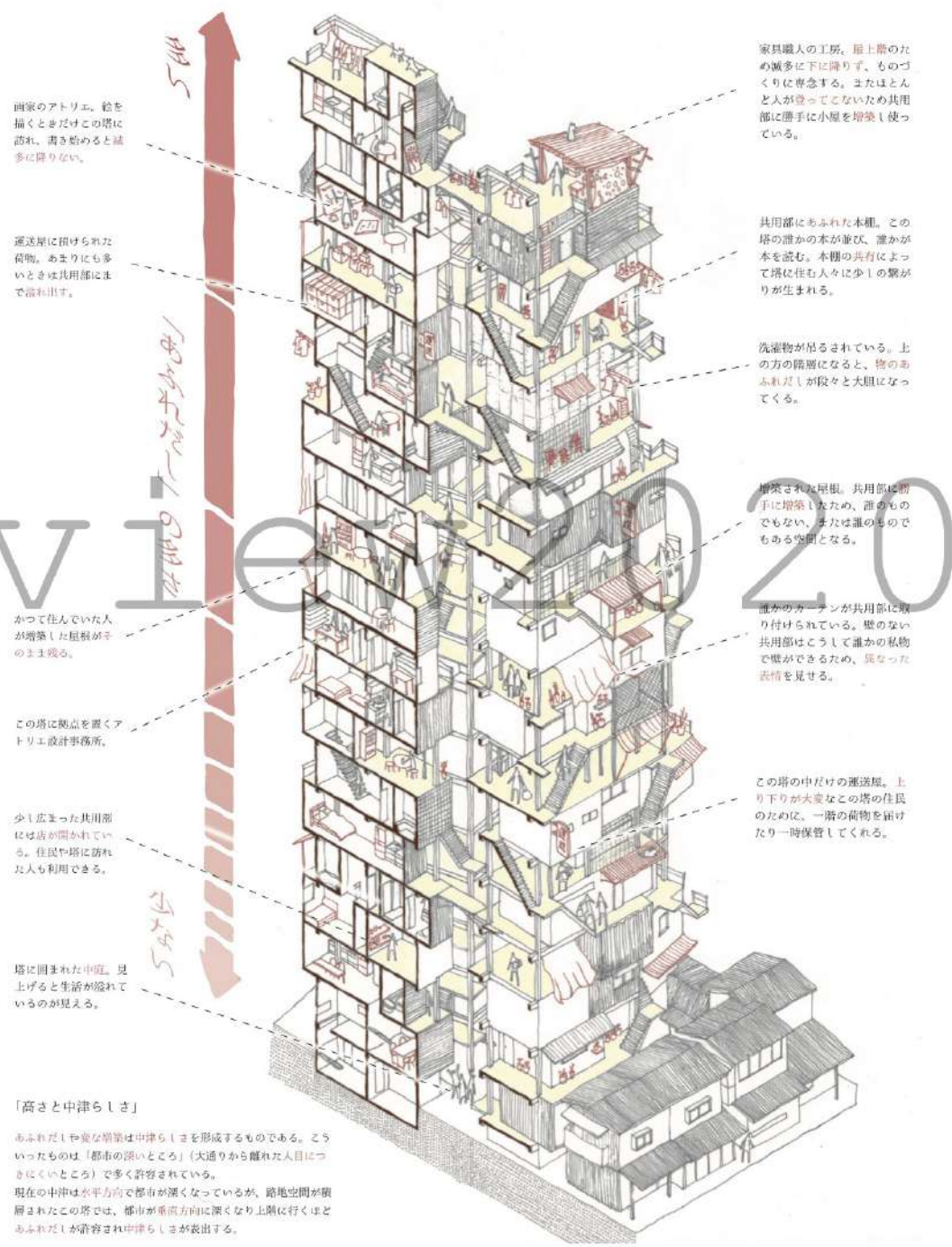
別の住民に代わり屋根は解体され、骨組みだけが残る。



新しい住民によって骨組みが別の使われ方をする。

中津の塔での生き方

現在の塔からは失われてしまったわざわざ高いところへ登る、という塔の身体性。こういった塔らしさを現代の塔に復活させることで、オフィスを利用しない在宅ワーカーが降りるのが面倒で塔から全くでないという選択肢や、高い部屋が売れるという現代の塔とは違い健康で降り降りできる人なら安く住める22階というような、塔での生き方も見えてくる。こういった少しの不便さが新しい生き方や塔空間を創出する。



画家のアトリエ。絵を描くときだけこの塔に訪れ、書き始めるとほとんど降りない。

運送屋に預けられた荷物。あまりにも多いときは共用部にまで溢れ出す。

かつて住んでいた人が増築した屋根がそのまま残る。

この塔に拠点を置くアトリエ設計事務所。

少し広まった共用部には店が開かれている。住民や塔を訪れた人も利用できる。

塔に囲まれた中庭。見上げると生活が溢れているのが見える。

「高さの中津らしさ」

あふれだしや溢る増築は中津らしさを形成するものである。こういったものは「都市の深いところ」(大通りから離れた人目につきにくいところ)で多く許容されている。現在の中津は水平方向で都市が深くなっていくが、路地空間が積層されたこの塔では、都市が垂直方向に深くなり上層に行くほどあふれだしが許容され中津らしさが表出する。

家具職人の工房。最上層のため滅多に下に降りず、ものづくりに専念する。またはほとんど人が登ってこないため共用部に勝手に小屋を増築している。

共用部にあふれた本棚。この塔の誰かの本が並び、誰かが本を読む。本棚の共有によって塔に住む人々に少しの繋がりが生まれる。

洗濯物が吊るされている。上の方の階層になると、物のあふれだしが段々と大胆になってくる。

増築された屋根。共用部は勝手に増築したため、誰のものでもない。または誰のものでもある空間となる。

誰かのカーテンが共用部に取り付けられている。燃えない共用部はこうして誰かの私物で賑わることができるため、真実な表情を見せる。

この塔の中だけの運送屋。上り下りが大変なこの塔の住民のために、一階の荷物を預けたり一時保管してくれる。

Design Review 2020







Design Review 2020

